

『起信論』解釋の變遷

——華嚴教學展開の根底として——

小林 實 玄

「起信論」は近年本來の如來藏の論書として研究されているが、華嚴教學に於いて缺くことの出来ないものであることは少しも變らない所である。ただし、いま問題とするのは、華嚴の各祖における「論」の註釋についての變遷をみるのではなく、華嚴の傳統における法藏澄觀宗密のそれぞれの教學展開の根底に「起信論」の理解が重要な意義をもっていることに注意するのである。

一 華嚴に於て、「起信論」に關する基本的解釋を示すのは言う迄もなく法藏である。彼の教學は「華嚴經」の教説の立場を以て樹立する所から、所謂教判による位置づけが基礎となるが、同別二教判五教十宗判等のうち、彼の主とする所は五教判である。「起信論」はこの五教判に於ては終教に攝せられるが、その解釋は殆んど心識を中心とするものであつて、「論」のアリヤ識に關し、法相宗（始教）のアラヤ識に對する如來藏の理事融通眞妄俱分のアリヤ識を説くことを課題

としている。

所がこの教判とは別に、如來藏の經論の註釋における、如來藏緣起宗等の四宗判がある。然るにこれは宗判であつて、教判としては五教判に従うものであり、「華嚴經」には觸れないとしても、「起信論」は宗としては四宗の最高位に置かれ、その實踐の立場は殊に重視される所であつて、このことが彼の觀門の書としては「妄盡還源觀」にみられるのである。

即ち、彼の觀門については、華嚴の傳統の「法界觀門」は根本としてそのまま「華嚴三昧章」の中に説かれるが、これを別の立場から論ずるのが「妄盡還源觀」であり、その別の立場とは「起信論」を根底とする立場なのである。それは、全體の結構としては「論」の一心二門三大四信五行に似た一體二用三徧四德五止六觀をたて、更にその重要な所には屢々起信論を引用する。例えば、「顯一體者謂自性清淨圓明體……起信論云、眞如自體有大智慧光明義故……自性清淨心義

故。」「二用者……一者海印森羅常住用。言海印者眞如本覺也。……言一法者所謂一心也。是心即攝一切世間出世間法即是一法界大總相法門體云々」等の如くであり、これが以後澄觀に於ける教學の展開の源となる點で注意されるのである。

二 澄觀は、この法藏を承けるのであるが、教學體系としては別教一乘のうちに「法界觀門」を攝する所にみられる如く觀門を主とするものであり、教判に於ては同別二教判を主とするがこれは十宗判で第八眞空絕相宗第九空有無礙宗と改めた如き「教」に對する「宗」の立場を重視するものである。

然るに、その觀門を立場とすることについて、その觀行の實踐は禪を以て論するのであるが、その觀門の根據となり又その内容をあらわすものが實は「起信論」であることは今の場合甚だ重要である。所で「法界觀門」を釋する「玄鏡」に於ては、傳統の觀門とする故か「起信論」については殆んど論じていないが、それでも敢て「華嚴經」の題目を解釋する所にその意圖は知られる。即ち大方廣を所證法、佛華嚴を能證人とする所に觀門の立場をみると共に、所證の法界を三大によつて解釋する所等は「起信論」を以て解釋の底意とすることが知られ、更にこの釋經題については「大疏」「行願品疏」に於て明示される如く、能證の「一心」と所證の「法界」とは、ともに「論」の「一心」「法界」を以て立論せられるのである。

然るに、彼に於ける「起信論」の解釋は、「論」の忠實な解釋でなく華嚴に於ける解釋ではあるが、ここに考えられることは、教としては漸教中の終教に攝するとしても、觀門としては頓の立場に於て把握することである。勿論これは彼の禪と不離の關係にあるが、その頓の立場は殆んど「一心」に關する「覺・不覺、本覺・始覺」によつて示されるのである。しかもこれが直ちに華嚴の立場として示されているのである。

この様な「起信論」の把握は、「大疏」に於ては所謂法性宗の解釋として、又「行願品疏」では「一心法界」として說かれる。「大疏」に於ては「玄談」は勿論「問明」「夜摩宮」「出現」等の諸品の釋にみられる如く、所謂法性宗としては不變と隨緣とを以てする緣起の解釋が、又觀門については悉く「得見心性」「法界一相」「始本無二」等を以て論ぜられ、すべて彼の禪觀的把握による起信論の解釋を以て說かれているのである。又、「行願品疏」では「其法界者……是曰無障礙法界。總該萬有卽是一心。於法界略分三種。一事法界、二理法界、三無障礙法界。云々」と説くが、この「一心」も亦「起信論」の一心に基くこと明らかである。

なお「一眞法界」として法界を體相用によつて解釋する立場もあるが、これ亦「論」を根底とする解釋であり、かくして澄觀の教學は、全く彼の禪觀的把握による「起信論」の解

釋によつて展開していることが注意せられるのである。

三 次に宗密であるが、彼は華嚴の第五祖に數えられるとともに、教禪一致の首唱者としてまた一つ獨自の立場を形成している。それは彼の著書の上によくあらわれているが、華嚴の立場としては「註法界觀門」と「普賢行願品別行疏鈔」等があり、禪の立場としては「禪源諸詮集都序」「禪門師資承襲圖」等があり、しかも彼の綜合的教學は主著「圓覺經疏」に示され、これらとは別に「原人論」がある。

まづ華嚴に關する所をみれば、「註法界觀門」冒頭の「法界」の解釋に、「清凉新經疏云、純唯一眞法界、謂總該萬有即是一心。然心融萬有便成四種法界。……」と所謂「總該萬有一心を直ちに「法界觀門」の解釋の上に説くのは澄觀より更に一步すすめたものである。又「行願品疏鈔」に於て「總唯一眞法界即是一心。起信云、所言法者謂衆生心。」等と述べる所もまた、澄觀をつぐものであつても、華嚴の一心に關して直ちに「起信論」を明示して論ずる所に宗密の立場がある。

ここで彼の禪の立場に注意すれば、「都序」に於ては禪の三宗（息妄修心宗、泯絕無寄宗、直顯心性宗）と教の三教（密意依性說相教、密意破相顯性教、顯示眞心即性教）をたててその融合を論ずるが、それはあくまで宗としての禪に於て三宗を開き、これに對應して三教をたてるのである。その禪の直顯心

性宗は彼の荷澤禪の立場であり、その華嚴の立場はこれに對應する顯示眞心即性教に説くが、根本としての一眞心性（靈知、寂知）は「華嚴經塵含經卷喻」を根據とし「如來藏」を以て直ちに「禪」の内容に於て論ずる。これは又「原人論」の「一乘顯性教」に於て説く所と同一であり、圓・頓・終を以て一乘とする澄觀の立場をうけるものであるが、その如來藏とは全く「起信論」を以て論ずるものである。ここに於て重要なことは、華嚴と如來藏とは禪によつて同一とせられるとともに、又華嚴と禪との融合は實踐的論據である如來藏を以て説かれることであり、しかもその如來藏が悉く「起信論」によつて論ぜられていることである。勿論それは禪に於て把握せられた「論」ではあるが、「一心」「三大」「始本無二」「不變隨緣」より「三心」「四信」「五行」に至るまで、全く「起信論」を根底として論立される所である。

所で、この様な禪の立場は「行願品疏鈔」で如何に説かれるかと言へば、所謂「一心」について性起門と緣起門とを開き、性起門には十玄門を論じ、緣起門ではこれに分淨と圓淨とを分つてその圓淨に頓悟と漸修とを論ずる。而してこの性起門を別教一乘とすることによつて、華嚴と禪とを融會しているのである。

この様に、宗密に於ては、澄觀では内包せられていた禪及び「起信論」の立場について、これを顯説する新しい解釋を

示しているのであるが、更に澄觀と異なる所は「圓覺經」を根本とすることである。即ち、「圓覺經」はすべての教をふくむ所にその立場があるとするのであるが、しかもこれを華嚴の五教に従つて終頓二教をその立場とすると言う。又、宗趣論では、これに通別を分ち、その別とは禪の立場を以てし、その通の立場に五宗を分つが、その五宗とは法藏の四宗判に華嚴の圓教・圓融具德宗を加えたものである。そしてこの經は如來藏緣起宗を宗趣として兼ねて圓融具德宗であると言う。

更に、その教學の理論的構成がまた全く「起信論」によつて注意される。即ち、「分齊幽深」の一段に於て五重の義をたてるが、その第一は「唯一心」を本源と説いてこれを「圓覺の妙心」と説くと共に直ちに華嚴の「眞法界」とする。第二にはこの一心によつて心眞如・心生滅の「二門」を開き、第三にはその心眞如門によつて「覺・不覺」の「二義」を論ずる。更に第四にはその不覺によつて「三細」を論じ、第五には「六麤」を説くが、かくの如くこの五重の義は悉く「起信論」を以て論成しているのである。

ここに於て、宗密の教學もまた、全く如來藏即ち「起信論」の實踐的把握を根底としてゐると結論することが出来るであらう。

この様に考察するとき、華嚴における「起信論」の解釋は、全く「起信論」の實踐的な觀門における把握によるものである。

り、これを根據として法藏より澄觀へ更に宗密へとその教學が展開していることが理解されるのであつて、この意味に於て華嚴教學展開の根底をなしていると言うことが出来るのである。

1 拙稿、「華嚴觀門の展開と教學の變遷」（佛教學研究第二十號）を参照されたい。

2 五教判の構成は、小乘・大乘、三乘・一乘、漸教・頓教・始教・終教等の組み合せによつて解せられるが、その開分の典據の一つに「五教章」では、「起信論」の「心眞如門」があげられることも注意すべきであらう。

起信論中、約頓教門顯絕言眞如、約漸教門說依言眞如、約始終二教說空不空眞如也。

3 拙稿「澄觀教學の研究——華嚴觀門の展開と教學の變遷（中）」（龍谷大學論集三七七號）を参照されたい。

4 高峯博士著「華嚴と禪との通路」

5 「禪源諸詮集都序」

〔承襲圖〕〔原人論〕

密意依性說相教	斷惑滅苦教	人天因果教	人天教
將識破境教	息妄修心宗	小乘教	大乘教
密意破相顯性教	泯絕無寄宗	牛頭宗	大乘破相教
顯示真心即性教	直顯心性宗	洪州宗	一乘顯性教
		荷澤宗	

（前註書二七頁参照）